プロレタリア文学運動の理想を
幅広い作家たちと共に追求し、
アジアの文学者との連帯を試みた、
戦前最後の労働文学雑誌、待望の復刻！

文学案内

（昭和10年7月～12年4月）

全10巻
別冊1
附録1

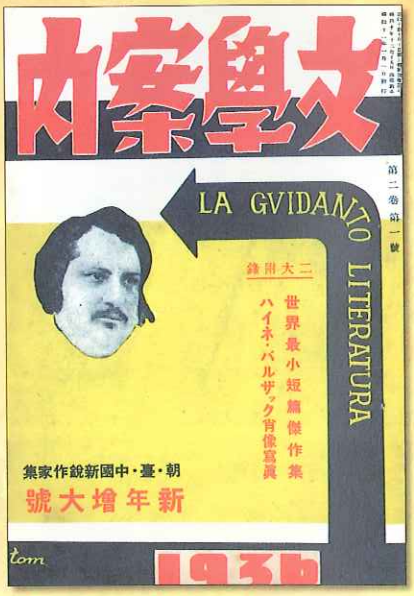
貴司山治◉主宰

創刊号（昭和10年7月）

不二出版

菊判・上製・総三、四五二頁
解題◉浦西和彦
本体揃価格◉一四〇、〇〇〇円＋税

第2巻第5号（昭和11年5月）



第2巻第1号（昭和11年1月）

復刻にあたって

『文学案内』の主宰者貴司山治（きしやまじ）は、大衆小説作家として、またプロレタリア文化運動の中心人物の一人として知られている。

昭和九年二月に日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）が解体し、治安維持法違反で検挙され拘束中であった貴司は三月に釈放され、その年の五月に政治的転向を声明した。

そして翌年七月に、「合法的な範囲」に退却しつつも、暗い時代への文学的抵抗を試みて創刊したのが本誌である。

編集責任者は貴司のほかに丸山義二と小野春夫、編集顧問には徳永直、藤森成吉、広津和郎、徳田秋声、大宅壮一、青野季吉らが協力し、「働く者の立場に立つ文学」をスローガンに掲げた。

本誌の目的は、文学好きの勤労大衆に向けて、小説・戯曲・詩歌等の創作の方法や鑑賞の仕方を教え、創作の見本を示して、「生産・勤労の場面を描いた小説」を募集・掲載し、労働者の中から作家を養成することであった。

また、国内においては文芸時評を展開し、全国の同人雑誌を総覧しつつ、同時に朝鮮・台湾・中国の文学者たちと連携して、アジアの文学作品を紹介し、さらには全世界の労働者文学の現状をも報告した。

しかし、貴司らのこのような文学活動を国家は許さなかった。昭和一二年一月に貴司は三度目の検挙・拘留に至り、四月には本誌も廃刊に追い込まれた。

小社では労働者のための啓発的文学雑誌『文学案内』の全二二号を附録とともに復刻し、労働運動史・プロレタリア文学史・旧植民地文学史の研究者に提供するものである。

——不二出版

昭和10年冬『文学案内』の座談会で。右より徳永直、大宅壮一、藤森成吉、舟橋聖一、島木健作、貴司山治、杉山平助（写真提供　伊藤共治氏）

貴司山治略年譜

一八九九年（明治三二年）	0歳	二月一二日　徳島県板野郡鳴門村で出生、本名伊藤好市
一九一四	15歳	鳴門尋常小学校高等科卒業
一九二〇	21歳	大阪時事新報懸賞小説に「紫の袍」選外佳作（三等）。大阪時事新報記者となる
一九二五	26歳	東京時事新報懸賞小説に「新恋愛行」入選
一九二六（昭和元年）	27歳	東京に転居　作家生活に入る
一九二八	29歳	東京毎夕新聞に「止まれ・進め」（後に「ゴー・ストップ」と改題）連載。この頃から「舞踏会事件」、「暴露読本」等プロレタリア大衆小説を多数執筆公刊
一九二九	30歳	日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）結成され参加
一九三〇	31歳	ナルプ第二回大会、中央委員となる プロレタリア大衆文学を提唱、議論を呼び、その総括として「芸術大衆化に関する決議」が発表された。 戦旗防衛講演会のため、江口渙、中野重治、片岡鉄兵、大宅壮一、小林多喜二らと京都、大阪、松坂などを巡回
一九三一	32歳	日本プロレタリア写真作家同盟結成、委員長となる
一九三二	33歳	治安維持法違反で検挙、四月～年末まで拘留
一九三三	34歳	「小林多喜二全集」編集に参画、発禁
一九三四	35歳	一月杉並署に再検挙拘留される。三月に釈放 ナルプ解散決議。貴司の留守宅にて開催される） 転向声明を朝日新聞紙上に発表
一九三五	36歳	「文学案内社」創設。雑誌『文学案内』創刊
一九三七	38歳	一月三度目の検挙拘留。年末に釈放 四月『文学案内』終刊。名実とも「プロ文学時代」終わる
一九四六	47歳	文学雑誌『東西』京都で創刊
一九五三	53歳	新聞通信社「作家クラブ」設立 後に「文芸社」と改名、昭和39年まで存続
一九六一	62歳	徳島の作家のための雑誌『暖流』を創刊
一九七三	74歳	一一月二〇日、脳梗塞で死去

（本年表は貴司山治氏ご長男の伊藤共治氏が作成された略年譜を元に作成いたしました）

内容見本

第1巻第5号（昭和10年11月）より

文壇の巨匠の訃に接く

志賀直哉氏の文學縱橫談

☆小林多喜二の思ひ出
☆彫琢をうけたゴルキイとチエホフ
☆「主人持ち文學否定論」の發展
☆文學の大衆化といふことについて
☆人生への幻滅なくては作家たりえず
☆有島武郎氏の二元的性格について
☆自分は小説らしくない小説を書きたい
☆徹底的手法と記錄の大切さ
☆暗い時世について若き作家に望む

答　志賀直哉
問　貴司山治

この記錄の初めに誌す

白樺派の中より出でゝ一番冷徹なリアリズムの手法を以て大正時代の文學の盛高峰をきはめた作家は何といつても志賀直哉氏であらう。

プロ作家の小林多喜二がこの志賀氏に私淑し、志賀氏の手法を「三、一五」や「蟹工船」等のおれの傑作に生かしたことは人の知るところである。

小林多喜二に對して、文學そのものに對し、時世に對し、社會氏の眼鏡のない所をきいて後進の道しるべとしたいとは、「文學案内」が全讀者を代表しての願ひであつた。

（62）

文壇の巨匠の訃に接く

大體一月頃にといふ規定であつたのをくり上げて、去九月二十五日、僕は奈良に志賀氏を訪ね、朝から夜中の十二時をすぎるまで、殆ど丸一日中、へと〳〵になるまで、何十萬語といふ沢山な話を、志賀氏からきいた。こちらからも國につて、隠分無遠慮にしやべつた。志賀氏は若い作家や、若い作家の仕事に、非常な理解と同情を持つてゐる。特に若い作家が元氣を出さねばならないといふことを力を入れて語つた。

こゝに記錄した問答は當夜の談話の半分にも足りない。かつ、記錄を志賀氏にみて貰ふひまがなかつたから、多少のまきちがひ、又は志賀氏の意に沿はぬ點があるかもしれない。しかし中心の、大事な點は悉く記錄したつもりである。

少々ヤーナリスティックにいふと、志賀氏がこれほど、胸襟をひらいて、文藝談を語つたといふことはかつてない。はじめはいやがられたのであるが、おしての「文學案内」の願ひを快く容れられ、とう〳〵朝から夜中まで、しやべりどほしに、しやべつて頂いた。いや、隠分志賀氏を、こちらからしひてしやべらせたかと思ふ。おしまひに、志賀氏は疲れて、眼が大きくなつてゐた。東京へかへつてきて、あとで志賀氏が健康を損じはしなかつたかと心配した。

とにかく、そんなにしてまで、「文學案内」の多くの讀者のために、得がたい談話をしてくれた志賀氏に感謝する！　讀者諸君もこの大正年間の代表的なリアリスト作家の語るところについて、大いに學ぶところあるように希ふ。（貴司生）＝下の寫眞は志賀直哉氏

小林多喜二を初めて知つた頃

「蟹工船」　僕は小林多喜二が死んでから最近までその遺稿の整理をしたり斯樹の編纂をしたりしてゐたのですが、小林の表現や形式は認めば讀むほどあなたの模倣だといふことがわかるのですが、また小林があなた、書いた手紙や、あなたが小林に與へた手紙などから見ても、小林があなたに傾倒してゐた程度といふものは實に驚刻なものがあるやうに思ふのです。そしてあなたの死に方をした小林に對してあなたもたいへん同情を表されたし、プロレタリア文學方策は小林の作品に隠心をもつ多くの働く大衆はあなたと小林の師弟の關係

（63）

文學案内十月號目次

扉表紙……村山知義……
再吟味を要求す　文學案内の目的……（一）
藝術派はどうなる…大宅壯一……（五）
能動派のプラン…舟橋聖一……（九）
農民文學の「明日」…立野信之……（一四）
新劇の觀衆諸君へ…村山知義……（一七）
バルビュスの途…阪井徳三……（一三）
シンクレアは進む…早坂二郎……（二四）
ジイドはなぜプラヒを…小松清……（二二）
朝鮮文壇の現狀報告…張赫宙……（三五）
臺灣の文學運動…楊達……（三六）
中國文壇現狀論…雷石榆……（三七）
勤勞者の文學の建設を語る座談會……（一〇〇）
出席者　藤森成吉　徳永直　青野季吉　杉山平助　大宅壯一　細田民樹　舟橋聖一　島木健作　貴司山治

本誌五大獨自講座
詩の つくり方……貴司山治……（一七）
戲曲の つくり方……三好十郎……（一八）
叙事詩の つくり方……遠地輝武……（一九）
短歌の つくり方……小熊秀雄……（二五）
……渡邊順三……（二四）

特別寄稿　我が短歌觀……尾崎行雄……（一二）

方みよ　大衆文學のよみ方（一）田村榮太郎……（二九）
啄木歌の評釋（一）矢代東村……（二五）
文藝時評……江口渙……（二八）
詩三篇
墓の上に劍はおかなくてもよい……藤山一雄……（三〇）
朝鮮女……田宋……（三一）
口が裂けてしまつた……小熊秀雄……（三五）
アンデルゼン自傳（一）……中野重治……（三四）

文壇の巨匠に訃く（一）全國同人雜誌總覽……（三四）

石田三成上演
「石田三成の上演に就て」……長田秀雄……（三六）
「石田三成の演出者として」……村山知義……（三六）
三成の妻を引うけて……伊藤智子……（三六）
自分の役の苦心を語る……小澤榮……（三七）
歌舞伎舞踊曲を奏せん……細川ちか子……（三七）
詩四篇・仲田勝重　大江鐵麿……（三八）
・塚原嘉重　三田真二……（三八）
短歌・三田英一　青江龍樹……（三九）
選後感・貴司山治　渡邊順三　遠地輝武……（一〇〇）
介抱上ハイキング……（一〇〇）　☆講評　後記……（一〇〇）

☆前進する文藝案内（十一月號豫告）……（一〇〇）
貨錄文學研究會…片岡鐵兵……（一〇）
牧逸馬の牛面…O氏生……（三一）
吉川英治のねゞと…山岡勇……（三一）
私が最も影響された本…諸家……（一〇〇）
吉屋信子の通俗小說…豆小僧……（一一四）
サーチライト……（一二）　アンテナ……（一二四）
☆懸賞小說募集規定……（一二）

（大勞働者にかこまれまさかりキルゴたれ（誌に寄稿））

第1巻第4号（昭和10年10月）より

「文学案内社」の想い出

伊藤共治 フリーライター・貴司山治長男

銀座の文学案内社の事務所の窓からは、掘割りの水面が見えた。四歳頃の記憶だか、流れもせぬ溜まり水がどんよりと淀んでいたように思う。かって銀座は四辺を掘り割りに囲まれていた。文学案内社は始めは西銀座二丁目、後には木挽町二丁目（東銀座）と、銀座のごく外れに所在したから、掘割りが見えて不思議はない。

貴司は幼児のころから私をよく連れ歩いた。文学案内社以外にも市ヶ谷の改造社だとか、治安維持法違反で執行猶予中の保護観察所への出頭にもついていった記憶がある。保護観察所はそのころ千駄ヶ谷の静かな一角にあった。

二・二六事件の時は、中央線の電車が不通になり父親が事務所から帰宅できなくなったというのを家で聞いた覚えがある。その翌年（昭和十二年）、文学案内は「速達の切手代もない」状態となり廃刊した。

文学案内は、貴司が二度の拘留を経て、左翼運動への根絶的弾圧と作家同盟の解散という状況の中で、作家同盟の遺言的方針「サークル活動に依拠した分散抵抗」を貴司なりに実行しようとした「地下鉄争議メンバーとの記録執筆活動」と「勤労者を基盤とした文学啓蒙活動」という二つの志の後者を担うものであった。

しかし国家権力は貴司の意図を見誤らず、それらを治安維持法違反として三度目の検挙を行った。しかも、淀橋警察署留置場という劣悪な環境に無期限に拘留するという一種の拷問を課することで完全転向を迫った。約一年の拘留の後貴司は〝本当に〟プロレタリア文学的志向から離れ、戦後も含めて二度とそれに回帰することはなかった。

遠い記憶の底にある銀座の掘割りの淀んだゆらぎは、一つの時代のどんづまりの姿を映す影として今想い返される。

第2巻第1号附録
ハイネ肖像写真

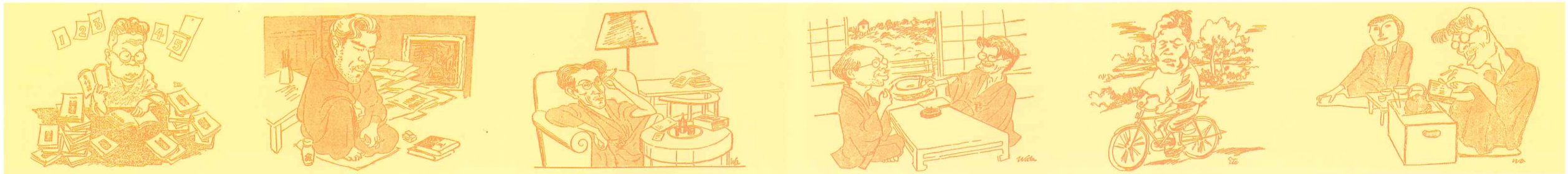
第3巻第2号（昭和12年2月）

プロレタリア文学運動「最後の光芒」

黒古一夫 筑波大学大学院教授

隆盛を誇っていたプロレタリア文学が権力による弾圧と「政治の優位性論」に象徴される理論偏重によって衰退を余儀なくされていた時期に、「最後の光芒」を放つようにプロ文派の復興とプロ文運動の再建を願って刊行された雑誌が『文学案内』であった。そして、貴司山治を中心とするこの雑誌の刊行時期が「満州事変」に始まる十五年戦争（アジア太平洋戦争）の中頃であったこと、編集顧問に藤森成吉や徳永直の他に徳田秋声、大宅壮一らがいたこと、及び寄稿者にプロ文系の中野重治や平林たい子らに加えて舟橋聖一や志賀直哉、金子光晴ら錚々たる文学者を擁していたことを考えると、『文学案内』が期せずして文学的人民戦線を形成していたのではないかという考えも成り立つ。

「働く者の立場に立つ文学―勤労大衆に愛され、親しまれ、理解され、その生活の友となり、向上発展の歯車となる文学が創り出されなければならない」（「創刊の挨拶」貴司山治）は、プロ文派が捲土重来を期した言葉であったのか、それとも彼らの「後退」を意味するものであったのか。いずれにせよ、未だ十分に検討され尽くされたとは思われないプロ文運動や十五年戦争下の文学に関する原資料が復刻されることは、歓迎されるべきことであり、今後の研究に大いに寄与するものと思われる。

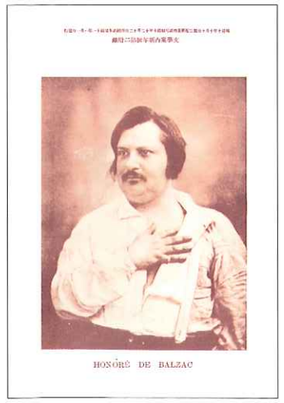


植民地文学研究にとって朗報

浦田義和 日本社会文学会代表、佐賀大学教授

一九三〇年代半ばの雑誌で、旧植民地と関わる文芸誌に、『改造』『文芸』『文芸首都』『文学評論』などあるが、今回復刻される『文学案内』も、全三二冊の内の一七冊が何らかの形で旧植民地と関わっている。第一巻四号から「朝鮮」「台湾」「中国」の文壇状況の紹介があり、他に特集として「朝・台・中国新鋭作家集」もある。中国の作家では、《魯迅》や《郭沫若》など、台湾の作家では、著名な作品「新聞配達夫」を書いた《楊逵》や《楊逵》の文学上の師とも言われる《頼和》が登場しているが、旧植民地の中でも、特に旧「朝鮮」との関わりが強くなるのは、「朝鮮」人作家として日本で流行作家になる《張赫宙》が、村山知義などと途中から『文学案内』の編集顧問になったからでもあると考えられる。さらにそれ以後、カップ（朝鮮プロレタリア藝術同盟）作家の《李箕永》の代表作の一つである「故郷」を、四回に亘って連載している他、その間、第三巻二号では「朝鮮現代作家特集」として、女性作家《姜敬愛》、プロレタリア文学作家《韓雪野》、モダニズムの《李孝石》、インテリ作家《玄民（兪鎭午）》など五名の作品を掲載している。他にも後に戦争協力詩を書くことになる《金龍齊》、あるいは「朝鮮」と関わったプロレタリア文学詩人の新井徹、後藤郁子なども登場している。

『文学案内』は、「大衆」や「勤労者」を主要な読者に据え、「全国（地方）」の同人誌にも目配りしながら、「世界文学」の現状を視野に入れつつ、日本プロレタリア文学者のみでなく、「植民地」の文学をも掬い上げようとしていたと言え、その全貌が容易に見られるようになることは、植民地文学の研究にとっても朗報である。



第2巻第1号附録
バルザック肖像写真

一冊、一冊繰る楽しみ

紅野敏郎 早稲田大学名誉教授

雑誌『文学案内』といえば推進者の役割を果たした貴司山治の「志賀直哉氏の文学縦横談」がたちどころに思い浮かぶ。小林多喜二の思い出からはじまり、ゴールキーとチェホフ、「主人持ち文学否定論」の発展、文学の大衆化、有島武郎の二元的性格などの貴司の質問に対して、胸襟を開いて志賀が語ったこの記録は、瀧井孝作の煮つまった対談とともに、昭和文学研究に寄与した意義は甚大。この記録の一冊はだれでも手もとに置いているだろうが、しかしその翌月号のその反響集（徳永直・舟橋聖一・徳田秋声・青野季吉・藤森成吉・片岡鉄兵）となると、意外に活用されていない。つまり『文学案内』は、一冊、一冊丁寧に繰ってみる必要があるのに、それを実行する人はきわめて少ない。『文学案内』の顧問になっている徳田秋声の「新旧時代の文学を語る」という対談も、貴司は一巻四号に掲げていた。秋声や直哉のような文学者より学びとろうとする意欲が誌面に現れている。ブルジョア文学と一蹴するだけでは、次の新しい作品は生まれないことを時代の推移のなかで、彼らは身体で感じとったのだ。さらに「新鋭婦人作家論」として、藤森成吉が野上弥生子を、杉山平助が中条百合子を、大宅壮一が林芙美子を、舟橋聖一が岡田禎子を、森山啓が平林たい子を、遠地輝武が松田解子を論じているが、現今の女性研究者のなかで、これらの作家論を十分に読み込んで研究を進めている人が幾人いることか。先行文献として的確に押さえている人すら見かけない。『文学案内』を時間をかけて集め、これを繰って、という作業が怠られてきたのである。関西在住の浦西和彦氏および貴司山治氏のご遺族の原本をもとに日本近代文学館所蔵のものなどで補い、ここに良心的なかたちの復刻本が刊行された。購読し、一冊、一冊繰って、研究を進めていただきたい。

第1巻第2号（昭和10年8月）

内容見本

第1巻第1号（昭和10年7月）より

挨拶の刊創

★次世のやうな目的をもつて、この雑誌を創刊したいと思ひます。

★働く者の立場に立つて文學――勤勞大衆に愛され、親しまれ、理解され、その生活の友となり、向上發展の車となる文學が創り出されなければならない。――これは幾百千萬の、働く大衆の要求だと思ひます。

★この大衆の要求にこたえる作品とは、主として、直接、働く者自身の生活の内部を描き、かれらにその明日を感ぜしめるやうな、深い感銘を與へるものでなければならない。

★そのためには、インテリゲンチヤ作家の助けをかりつゝ、働く階級自身の中からかゝる作家を養ひ育てることが何よりの土壌であると思ひます。

★この雑誌は、多くの進んだインテリゲンチヤ作家、既成の勞働者出身作家等にたのんで、働く大衆の中の、文學好きの人々に小説や詩や戯曲の作り方、書き方をくはしく、深切におしえ、手引きする記事をのせて、できる丈け右の目的を果して行くのを何よりの任務とします。

★この雑誌は進歩性のある作家のいゝ作品をのせて行くのと共に、未知無名の勞働者、並びにその側に立つすべての人々の書いた熱心なすぐれた作品を世に送り出すことを大きな目的といたします。

★これらの目的のために「文學案内」は衆智の力をつくすことをかたくお約束します。諸君はどうか支持して下さい。今から、まづ千人の直接讀者を求めるために三ケ月間はこの小さな形で出して無代進呈します。第四號（十月號）からは百三十頁定價三十五錢で本式に出しますが、直接讀者が千人になり、それを含めての發行部數が五千になればすぐに百四十頁以上にして三十錢に値下げします。それらは皆誠實にやって行きます。

★その他、すべての點で働く人達の立場に立つて活動して行きますから、それには諸君が惜しみなく力を協せて下さることをねがふ次第です。

（編輯責任者・貴司山治）

創刊七月號目次

創刊の挨拶……貴司山治…（一）
迷へるロマン派……大宅壯一…（四）
白鳥と藤村……黒島傳治…（五）
文學を志す人々のために…（八）
中野重治　三上於菟吉
千葉龜雄　近松秋江
戸坂　潤　細田源吉
村山知義　丹羽文雄
三好十郎　北村小松
松田解子　佐々木孝丸
山本實彦　神野岩三郎
勝山　潤　登田三郎
榮山嘉樹　加賀耿二
倉井勝一郎　田郷虎雄
ゴルキーに學べ……德永　直…（八）
讀者の特典……（一二）
懸賞小説募集規定……（一七）
文壇茶話……（一八）
創作　蹄……烏木健作…（二二）

昭和9年9月。右より丸山義二、貴司山治（写真提供　伊藤共治氏）

第1巻第4号（昭和10年10月）より

「文學案内」は朝鮮、中國、臺灣の文學に同胞的な親しみを感じ、相ひきゐて新時代の文學の殿堂に參ぜんことを希つてゐる。朝鮮、中國、臺灣の詩人、作家よ、こゝに君が友「文學案内」がある。日本の勤勞大衆は君たちのたえざる通信と作品がこゝに現はれることを待ち望む!! われ〳〵は君たちに東洋の朝の握手を送る！

朝鮮文壇の現狀報告

張赫宙

「群雄設」事件と「カップ」の發足

朝鮮の文學については、これまで數度日本文壇に紹介されたことがあるし、私に課せられた此の文の題も朝鮮文壇の現狀であるから、私は極く最近のことを叙述することしたい。

朝鮮文壇に現れる醜運動や潮流はほゞ日本文壇と軌を同じくして居る樣だし、目立つやうな特徴はないが、昨年の初夏、「新興藝術」事件と謂はれる××旋風に依つて、カップ所屬の殆ど凡ての作家や評論家が國内の人々となつてからは尚のこと無氣力になつてゐる。この「新興藝術」といふのは主として左翼文人によつて組織された劇運動團體であつて「西部戰線異狀なし」を京城で一回公演したきり、大球でも平壌でも上演を禁止され活動が阻止したのである。この上演禁止はそれ以外にも何等かの意味が含まれてゐるのではないか、と當時私は感じた。日本内地では大手を振つて通ることでも、それが一度朝鮮に渡つて來ると直ぐに×××殺は××犯に巡ふことがしばゝ〳〵であつて、それは朝鮮の事情に通じてゐない人には誠に不思議に思はれるだらうと考へる。「西部戰線異狀なし」が唯の一回でも上演を許されたといふことは、これは全く破天荒な出來事であつたのだ。果然、「新興藝術」は某種の主義の宣傳を目的とする秘密結社だとの……、それまで蛇蝎のやうに嫌はれてゐた左翼文士、映畫人達を半島内から一掃するかのやうに叩き込んでしまつたのである。

カップはその少し以前から、日本のナルプの解消に勧められて解散か解消か非解消かの問題をめぐつて事實上存在しないかのやうにさへなつてゐたが、さうは言つても、カップに所屬してゐた文人達は、賀賀と朝鮮文壇の中堅的存在であつて、同伴者作家も、民族主義文學者も、これら左傾評論家の前には常に藝術の狀態にあつた。しかし、この左翼評論家の中には隠分亂暴な一種與太者的人間もゐて、カップの體面を傷けること甚しかつたが、「新興藝術」事件によつて一切の雜音は鳴りを潜めた。と民族主義者（朝鮮に於ける）プロレタリア派）側の所謂大家達はさう考へたのである。

これらプルジョア派を形成してゐた大家達が再び大衆の上に安かな顔を見せ、中間的位置にゐて形勢を透視してゐた同伴者乃至プルジョア文學に細を見せたがつてゐた若い作家達を安心めい元氣で動き出したのはそれから程のことである。

今は國體も何もない

今日の朝鮮文壇には常々あれ樣の藝威を見せたマルキシズムも全く影をひそめ、最近日本文壇からの移入、行動主義文學すらも、單なる紹介文が二三現れた以外、積極的の關心を示すものは一人も出ない狂無氣力な、言ひ換へる的……狀態になる。滿洲事變以後の日本の國際情勢を考へたら、朝鮮のそのような狀態も諒解が行くことだらうと思ふ。

だから、單なる文人達のグループ――例へば文人相互の親睦と向上を計るといふ至極穏かな「九人會」といふ集りと、海外文學の研究と紹介を目的とする「激外文學派」の如き以外には何等の團體も組織もないのである。

今日、各新聞上に活躍してゐる人を紹介して、朝鮮文壇の現役作家を略述して現狀をみることにしよう。

新聞小説がヒノキ舞臺

朝鮮文壇で大家たらんとするならば、第一に新聞に連載小説を書かなければならんやうになつてゐる。それは李光洙や金東仁や廉想渉の諸氏のやうな朝鮮文學の創始時代からの（廢物にいふと朝鮮の新文學は李光洙の「無情」を以て始まる）大家達が主として新聞に依つて活躍して來たのと、他に恒存的な發表機關の乏しかつたのと、新聞にのつて始めて大衆的人氣をかち得たこと等によつて、さういふ觀念が植えられたのであらう。しかも、朝鮮の新聞小説は、日本の新聞小説とは豈か越きを異にして、純粋の新聞小説は少く、興味と藝術との混合物が多い。

牧羊鳥に似た李光洙

それは、例へば李光洙の「嘉實物」を讀めばすぐに分ることである。「東亞日報」に十に近い長篇を發表し、朝鮮文壇の元老を以て自負し他非に許してゐる李氏は、文學的效樂のなかつた初期の讀者に「小説」とは如何なるものかを敎へたのみでなく、その上に漸次にそのやうな効能を讀者の數を經年增加させ、あれだけの小説の讀者の數を經年增加させ、あれだけの長篇を書いたといふ點には何人も頭が下るであらうし、朝鮮文學を論じ、李光洙の文學を批判する者は、以上のやうなハンディキャップを抜きにしては論られぬものである。

しかし、そのやうなハンディキャップを抜きにして、單に藝術品として李光洙の文學を見るときは、正直に言つて高いレベルの作品だとは決して言へないものである。李光洙の最近の作品だといふ「土」も、「再生」も私は昨

新しい報告

朝鮮……張赫宙
中國……雷石榆
臺灣……揚逵

主要執筆者・関連年表

編集責任者

貴司山治　丸山義二　小野春夫

編集顧問

徳永　直　江口　渙　藤森成吉　広津和郎
村山知義　徳田秋声　木村　毅　細田民樹
大宅壯一　青野季吉　加賀耿二　張　赫宙

主要執筆者

秋田雨雀　新井　徹　伊藤永之介　上野壯夫
宇野千代　沖野岩三郎　小熊秀雄　尾崎行雄
遠地輝武　郭　沫若　鹿地　亘　片岡鉄兵
金子光晴　神近市子　上司小剣　亀井勝一郎
韓　雪野　北川冬彦　草野心平　窪川稲子
窪川鶴次郎　蔵原惟人　黒島伝治　小林多喜二
佐々木孝丸　志賀直哉　式場隆三郎　島木健作
杉本良吉　杉山平助　千家元麿　千田是也
高橋新吉　田村栄太郎　田村俊子　近松秋江
千葉亀雄　中条百合子（宮本百合子）　壺井繁治
坪田譲治　戸坂　潤　中野重治　中村星湖
新居　格　丹羽文雄　野上弥生子　長谷川時雨
葉山嘉樹　平林たい子　平林彪吾　布施辰治
舟橋聖一　細田源吉　本庄陸男　正宗白鳥
松田解子　三上於菟吉　三好十郎　百田宗治
矢代東村　柳瀬正夢　山本実彦　山本有三
楊　逵　頼　和　李　箕永　魯　迅
渡辺順三

◉近代日本社会・労働文学雑誌等関連略年表

西暦（明治三四年）	創刊された雑誌・機関誌名	社会の動き
一九〇一年		社会民主党結成即日禁止
一九〇二		日英同盟
一九〇三	社会主義・家庭雑誌・平民新聞	平民社創立
一九〇四		日露戦争
一九〇五	天鼓・火鞭	
一九〇六	社会主義研究・ヒラメキ・簡易生活	日本社会党結成
一九〇八		赤旗事件
一九〇九	スバル・自由思想	
一九一〇	白樺	大逆事件・韓国併合
一九一一	青鞜	
一九一二	近代思想・友愛新報	
一九一三（大正二年）	生活と芸術・第三帝国	
一九一四	へちまの花・反響	第二次世界大戦
一九一五	新社会・科学と文芸	
一九一六	洪水以後・文芸雑誌・日本評論	日蔭茶屋事件
一九一七	中外	ロシア革命
一九一八	文明批評・赤い鳥・新しき村	シベリア出兵・米騒動
一九一九	我等・労働文学・黒煙・改造・国家社会主義・解放（第一次）	日本社会主義同盟創立
一九二〇	種蒔く人・生長する星の群	
一九二一	前衛・女性改造	全国水平社結成・日本共産党結成
一九二二	赤と黒・文芸春秋・赤旗	関東大震災
一九二三	クラルテ・文芸戦線・戦闘文芸	
一九二四	原始・文党・無産者新聞・解放（第二次）・文芸市場	
一九二五		普通選挙法公布・治安維持法公布 日本プロレタリア文芸連盟（プロ連）結成 （プロ連）を日本プロレタリア芸術連盟（プロ芸）に改称
一九二六	プロレタリア芸術・農民	金融恐慌始まる
一九二七（昭和二年）		三・一五事件　全日本無産者芸術連盟（ナップ）結成
一九二八	前衛・戦旗・詩と詩論	四・一六事件　日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）結成
一九二九		労働争議・小作争議続出
一九三〇	プロレタリア演劇・プロレタリア短歌	満州事変
一九三一	プロレタリア詩・文学新聞・プロレタリア文化	（ナップ）が日本プロレタリア文化連盟（コップ）に改組
一九三二	プロレタリア文学	五・一五事件　プロレタリア作家クラブ結成
一九三三	労農文学・文化集団・人物評論・文学界・文芸	小林多喜二虐殺される。プロレタリア文学雑誌発禁連続
一九三四	文学建設者・詩精神・文学評論・現実・テアトロ	（ナルプ）解体声明　文芸懇話会結成
一九三五	日本浪漫派・詩行動・文学案内	天皇機関説事件
一九三六	人民文庫・批評	二・二六事件
一九三七		盧溝橋事件

（赤文字の雑誌は小社にて復刻済）

文学案内

全10巻・別冊1・附録1（全2回配本）

◉体裁――本文＝菊判・上製・総三、四五二頁（各巻平均三五〇頁）
附録＝①世界最小短編傑作集「小さい花束」　菊半判・並製　一〇二頁
②ハイネ・バルザック肖像写真
③「文学新聞」2号及び8号

◉別冊――解題・総目次・執筆者索引（別冊のみ分売可＝一、〇〇〇円＋税）
ISBN4-8350-5502-0

◉解題――浦西和彦（関西大学文学部教授）

◉推薦――伊藤共治、浦田義和、黒古一夫、紅野敏郎

◉原本――発行社＝文学案内社／編集発行人＝丸山義二／編集責任者＝貴司山治、丸山義二
発行＝第1巻1号（昭和10年7月）～第3巻4号（昭和12年4月）全22冊・附録1

◉原本提供――伊藤共治氏・浦西和彦氏、同志社大学人文科学研究所、日本近代文学館

◉本体揃価格――**一四〇、〇〇〇円＋税**（全2回配本　各配本ごと七〇、〇〇〇円＋税）

◉配本――第1回配本（二〇〇五年六月刊）［第1巻～第5巻・別冊1・附録1］
ISBN4-8350-5496-2
第2回配本（二〇〇五年一〇月刊）［第6巻～第10巻］
ISBN4-8350-5503-9

第1巻第3号（昭和10年9月）

第3巻第3号（昭和12年3月）

◉関連図書

人民文庫　全26冊・別冊1

武田麟太郎＝主宰［昭和11年～13年刊］

❖別冊＝解説（小田切秀雄）・総目次・索引
（別冊のみ分売可＝本体価格1、000円＋税）

❖菊判・B6判・並製・総5、034頁

❖本体揃価格＝180、000円＋税

二・二六事件のまさに一〇日前に創刊された本誌は、内務省の後押しで文芸統制のために結成された文芸懇話会や一部にファッショ的傾向のある『日本浪曼派』などの文学の体制内化を厳しく糾弾し、被抑圧階級＝庶民に文学の起点を求めた。反ファシズム・人民文学志向の文学雑誌として、苦悩する若い左翼文学者たちの戦前最後の砦となった本誌が、文学史上・近代史上に占める位置は重要である。《復刻版》

●推薦＝池田浩士・小田実・長谷川啓・水上勉

農民　全5巻・別冊1

犬田卯・鍋田研一ほか＝主宰［昭和2年～8年刊］

❖別冊＝解説（高橋春雄）・総目次・索引

❖A5判・上製・総2、542頁
（別冊のみ分売可＝本体価格1、000円＋税）

❖本体揃価格＝85、000円＋税

農民文学運動が興隆した一九二〇年代、犬田卯らが一九二七年に創刊した農民文芸会の機関誌。大同団結をうたって都市のプロレタリア文学と一線を画しての農民自身による解放・文化創造を目的とした。《復刻版》

●推薦＝小田切秀雄・住井すゑ・林宥一

クラルテ

小林多喜二＝主宰［大正13年～15年刊］

❖解説（布野栄一）・総目次・索引付き

❖A5判・上製・函入・総216頁

❖本体価格＝4、000円＋税

本誌は、小林多喜二が北海道拓殖銀行に勤務しているころ島田正策・戸塚新太郎・平沢哲夫・武田暹ら文学仲間とともに北海道小樽で発行したアンリ・バルビュスのクラルテ運動の刺激・影響の強い同人雑誌である。《復刻版》

●推薦＝小笠原克・松本忠司

●表示価格はすべて税別。

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084